

## 大阪ミナトクルーズと水都体感の小旅行

泉 隆博

10月18日(土)、地下鉄中央線大阪港に集合。水都大阪に生まれ育ちながら船に乗った経験の少ない私です。船上から大阪西部の街を眺めることで大阪を再発見することを期待して、大阪ミナトクルーズの40余名は出発しました。

### 1) ミナトクルーズ

好天にも恵まれ、大阪湾をめぐるクルーズでは大きな近代的な橋をくぐったり、またコンテナ埠頭やフェリーターミナルも間近に眺めることができました。途中、「飛躍する大阪港スーパー中堅港湾」の大きな文字の横に広大な未開拓の土地が残り、何か考えさせられました。大阪市の巨大なゴミ焼却場・天保山ハーバービレッジ・海遊館・ユニバーサルシティの建物が見え、1時間の船旅で出発点に戻りました。

天保山観覧車の前で昼食解散。私は商品名に誘われて「ぶっかけ七福神うどん」を食べ、観覧車で見える近代大阪を想像したところです。

### 2) 天保山渡船

午後はまず天保山へ足を運びました。天保年間に渡



天保山から渡船に乗る  
(上は天保山大橋)

いったん「目印山」と呼ばれましたが、のち「天保山」となって現在では日本一低い山(4.53m)として知られます。すぐ近くには天保山渡船場があり、近代的な高速道路の下を渡船に乗って対岸の桜島へ着き、そのままJRで西九条へ移動しました。



大阪湾の船上から見るWTCとコンテナバース

### 3) 安治川トンネル

西九条からは、阪神電車の難波乗り入れ用に建設中の高架橋を見ながら安治川トンネルへ。ここは安治川を渡す源兵衛の渡し跡に掘ったトンネルで、エレベーターまたは階段(90段)を使用して川底部に降りていきます。トンネルの長さは80.6m。外から見た建物はトンネルになっているとは見えなく、知る人ぞ知る昭和10年に着工した当時の土木技術の粋を駆使したトンネルで、かつては車道もありましたが、現在では歩行者と自転車を使用しています。

### 4) 安治川開削と河村瑞賢

トンネルをくぐり、波除公園へ。淀川(大川)の流れをスムーズにするために河村瑞賢が九条島を切り分けて安治川を開削し、大坂の保全と経済発展を念頭に置いた大坂優先の治水策を実現しました。波除公園付近にはその開削工事にともなう土砂で築造された元祖「目印山」がありましたが、これはのち瑞賢山とも呼ばれました。公園内にある築山がその名残?であったらおもしろいところですが…。

ゆっくり自分のペースで歩く展望中心の山歩きも好きですが、船で普段見慣れたはずの大阪の街を水上から見直してみるのも身近なレクリエーションと感じさせてくれた小旅行でした。

## 篤姫を訪ねて

一丸 忠邦

鹿児島は九州の南端にあり、南に海が開けている。桜島（御岳）や開聞岳の噴火で大地が成り立ち、畑は全て火山灰土である。

この地の島津家の長い歴史の中で大きな節目があった。関ヶ原の戦いの終盤、島津義弘は家康の眼前まで迫り敵中突破したことである。この時以来、両者は和戦両面の構えとなった。

幕末、徳川將軍家から「誰か家定様の正室に」という声がかかったのもこのことが底流にあった。その家定の正室に斉彬が目つけたのが篤姫である。これがなければ篤姫もあの松林の続く今和泉の海岸の石段を駆け降り、海で遊ぶ勝気な姫として過ごしていたことだろう。

暑かったが日陰は涼しい中、歴友の旅「篤姫ゆかりの地を訪ねて」（9月10日（水）～12日（金））では、縄文・弥生時代（上野原・橋牟礼川ともに複合遺跡）、文禄・慶長の役（沈寿官窯）、篤姫の生きた幕末・維新、太平洋戦争（知覧）、昭和（石橋公園）と巡り歩いた。

やがて篤姫は天璋院となり、薩摩を思いながら徳川の女性として生きていく。城下からは桜島がよく見えるが、江戸にいる篤姫は一幅の掛軸にしか思いを馳せるものはなかった。だが、江戸にあってあれだけの力を発揮できたのは本人の才能とともに多くの本を読み、世の動きを捉える情報収集力があつたからだろう。凛とした女性といわれるが、「天璋院様はひとつの飯台で大勢の女中と一緒に食事をなされ、酒でも三升徳利に入れ少しずつお飲みになる」と勝海舟も語っているような親しみやすさもあつた。幕府崩壊の時には大奥の女性の行く末を見、16代家達を立派に育てている。

だが、「篤姫」の姿は随所に見え隠れしていた。火山灰で埋もれた上野原や橋牟礼川の縄文・弥生の村の復興に率先して働く女性のなかに「篤姫」の姿が見えた。また、知覧の特攻基地で若者達の面影をみた島浜トメさんに「篤姫」の姿を見たのは私だけではなかったろう。

全日空552便が夕暮れの鹿児島空港を飛び立った。私の胸には、薩摩の人たちの熱き情熱の余韻があつた。いろいろな人の世話になり、いろんな人と親しく話をすることができました。ありがとうございました。



上野原縄文の森公園で全員写真

篤姫の実家である招宿の  
今和泉島津家の屋敷跡



## 綿業会館を見学して

上野 純子

8月9日(日)、綿業会館の食事付見学会に参加しました。11時に本町に集合、参加される方は圧倒的(私も含めて)女性が多く、近代モダン建築とそこでいただくランチは、やはり女性に人気のようです。皆さん、ちょっとオシャレして、といった感じでした。あとで申し込みが多数で抽選になったと聞き、今回参加できた幸運を喜びました。

2班に分かれ、ガス燈がならんでいる三休橋筋(北に向かうと梅植木橋につながる)ので梅植木橋筋と呼ばれたこともあったそうで、まずは外観から見学しました。そして、正面玄関から中へ入りました。普通は会員の方しかこの正面からは入れないそうです。玄関ホールで、この建物が建てられることになった岡常夫氏の遺言の話、設計者の渡辺節氏、ヘッドクラフトマンの村野藤吾氏についての説明を聞きました。

昭和6年に建てられた綿業会館ですが、当時すでに将来の空調設備の普及のことを考えて設計されており、空調用のダクトを内蔵させ、地下に設備用スペースを残して建てられています。しかも、その空調の排出口のカバーが素敵なこと! 内装になじんでおり、そうとはわかりません。設計者の先見の明に驚かされ、またデザインセンスの良さに皆さん感心されていました。

そして、1階、3階、地下のそれぞれ様式スタイルの異なる各部屋を見て回り、現代の私たちから見ても素晴らしくおしゃれな内装が本当にステキでした。当時の様子を充分残しているこの建物でも、戦時中には金属類や皮類を供出したり、空襲で被害を受けたりした部分もあります。

見学の後は、楽しみにしていたランチを1階会員食堂でゆっくりいただきました。

とても優雅な気分を味わうことができました。どうもありがとうございました。



綿業会館談話室での見学風景

## 西国街道を歩く 第5回 箕面桜井～茨木豊川

末廣 訂

西国街道を歩く第5回は箕面市の南側を西から東に向かって歩くこと約7キロのコースでした。今回の見学のメインはなんとと言っても、赤穂義士の一人として名が知られた萱野三平の旧邸です。

9月28日(土)、秋のお彼岸も過ぎやや肌寒い曇天の昼過ぎ、われわれ44名は阪急桜井駅から街道を東へ向かって出発しました。最初は、牧落八幡宮を中心とした旧村内の大坂道・西国街道の交差点にある道標や、江戸時代の年貢米を一時保管した郷倉跡、そして高札場跡を見学しました。

さらに国道171号線沿いに刈り入れ近い田んぼを右手に見ながら1時間ほど歩いて、やっと萱野三平旧邸に到着しました。明治時代、萱野邸は取り潰されたが、萱野家と地元の方々の努力により、長屋門と土塀の一部は保存され、現在、大阪府の史跡に指定されています。

萱野三平は、主君浅野内匠頭の刃傷事件の折、事件を伝える使者として江戸から早駕籠で赤穂へ向かった途中、生家の前で母親の葬式に出会ったがそのまま駕籠を急がせた話、また主君の仇討ちに加わるかべきか、父親の忠告でやめるべきか忠孝板ばさみになり、長屋門の一室で自刃し、27歳の生涯を閉じました。屋敷内に建っている辞世の句「晴れゆくや 日ごろ心の 花曇り」の石碑がもの悲しく、胸を打ちます。

その後、勝尾寺表参道の大鳥居や楠木正成が立ち寄り水を飲んだという井戸を見学して、無事大阪モノレール駅「豊川」に到着、解散しました。

事前準備と当日の引率・案内をいただいた幹事さん、学芸員の大澤先生にお礼申し上げます。



萱野三平旧宅前にて(撮影:近藤信子さん)

特別企画展

# お菓子の博物館

懐かしいおまけなどがいっぱい!

— 初公開・山星屋コレクション — を開催します。

大阪創業の菓子卸売業(株)山星屋には、江戸時代から現代にかけてのお菓子に関する看板、ポスター、おまけやブリキ・紙などのお菓子の容器、アメ型やチョコレート型といったお菓子の製造道具など、日本だけでなくヨーロッパに及ぶコレクションがあります。今回の展示ではこの中から明治・大正・昭和の時代のものを中心に選び、近代の懐かしいお菓子の歴史と文化を振り返ります。ぜひご家族、お知り合いお誘いあわせのうえ、ご来館ください。



不二家のミルク 看板

**会期** 平成21年 1月14日(水)～4月6日(月) 火曜日休館

**開館時間** 午前9時30分～午後5時(休業日は午後6時まで)※入館は閉館の30分前まで

**会場** 大阪歴史博物館 6階 特別展示室

**入場料** 常設展示観覧券でご観覧いただけます。  
大人/600円(540円) 高大生/400円(360円)

※( )内は20名以上の団体割引料金  
※中学生以下・大阪市内在住の65歳以上の方(要証明表示)、障害者手帳等をお持ちの方(保護者1名を含む)は無料  
※友の会会員は会員証提示で閉館中何日でもご観覧できます。  
会員証を忘れずに。



ヤシマドロップス車形容器

**展示解説** 1月24日(土)、2月14日(土)、2月28日(土)、3月14日(土)、3月28日(土) ※各回14時から、30分程度



## 歴博の『○』

博物館1階の床に表示された赤い「○」印が、前期難波宮の柱跡を示していることは広く知られていると思います。ところで、こんな場所(写真)にも「○」があることをご存知でしたか?博物館北側の自動車専用のスロープにあるため、知らなかった方も多いのではないのでしょうか。

この柱穴は1997年の発掘調査で発見されたものです。それまで前期難波宮の倉庫群を囲う塀は、NHK側の北出口を出たところでL字形に曲がり、ここが宮殿の北端ではないかと考えられていました。ところがこの柱穴の発見によって、南北の塀はL字形の角よりさらに北へ伸びている、つまり北側にも何らかの区画があったことが判明したのです。残念ながら、その後に行われた北隣(大阪府警本部)の発掘では、遺跡の残りが悪く、塀の続きはわかりませんでしたので、いまだ謎は謎のまま残されています。

目立たない場所にひっそりとある「○」ですが、実はけっこう重要な意味を秘めています。歴博に来られたときに、ちょっと覗いていかれてはいかがでしょうか。(ただし車には十分お気をつけください)。(豆谷浩之 学芸員)



自動車専用スロープの「○」

### 編集後記

今年も夏から秋にかけてさまざまな行事をおこないました。本号の参加記を拝見するとそれぞれの楽しかったことが思い出されます。しかしながら、ご応募の多かった一部行事では会場の定員の関係で抽選をさせていただく結果となってしまいました。ここに改めてお詫びを申しあげるとともに、今後幹事さんともども行事の立案・実施に工夫を重ねていきたいと思っております。なお、歴博のホームページに友の会のコーナーができました。お知り合いの方にもご紹介ください。(大)